

ユニテ

UNITÉ

2



目 次

ロマン・ロランの言葉	1	
ロマン・ロラン「母への手紙」	宮本正清	2
マルウィータとロランの往復書簡	南大路 振	6
戯曲「愛と死との戦い」について	20	
随想「モンハルナスの思い出」	宮本エイ子	31
ジャン・クリストフを再読して	織田和夫	35
友の会だより	39	



日本・ロマン・ロランの友の会編

《 ロランの言葉》

もう一人の自分

「…私は生活し、見、行くことを停止することはほとんどないので、自分が独りだということにはほとんど気づきません。私は自分に話し、自分に向って考えます。ほんとうに私は独りではありません。私ともう一人がいます。そしてそのもう一人が私を一人の友人のように、一人の仲間ののように、ほとんど一人の他人のように見なします。——それから、冗談はぬきにして、私にとっては時間と空間とはあまり存在しません。昨日もなく、明日もなく、すべてが今日であり、あなた方とお別れしたのは今日であり、私たちがまた会えるのも今日のようにおもわれます。じっさいは、それは私にとっては一つの外見以上のもの、永遠にたいするひじょうに確かな一つの信仰で、それは空間と時間との否定以外のものではありません。——数行まえから私は自分の友人、私の幽霊と話しているのに気づいています。——この独語を終ります。」（1889年11月18日—イタリア、オルヴィエトから、パリの母に送った手紙の一節）

ローマ留学中の二三才の若いロランはゆたかな想像の中で、もう一人の自分と話している。そして、自由な彼の愛の翼は空間と時間の外に天翔って行く。そこから、やがてジャン・クリストフも生れてくるだろう。

—— 宮 本 正 清 ——

ロマン・ロラン 『母への手紙』

宮本正清

ロマン・ロランにおいては、手紙は著作に劣らない魅力と意味をもっているわたしは思っている。ここに取りあげるのは、「カイエ・ロマン・ロラン」の第20巻として一九七一年にアルバン・ミシェル社から刊行されたもので、一九一四年一月九日に始まり、一九一六年二月三日をもって終っている。一九八通のこれらの手紙に満ちあふれているのは、一言にしていえば、深いロランの愛情である。少しの気温の変化や過労にも逆らえない、病弱な、年老いた母が、ドイツ軍の絶えまない脅威下のパリにいることを思うとロランの心は日夜、休まることはなかった。ところが、母にとって、最大の不安と心配は、戦争の不条理とその害悪を糾弾してやまない息子にたいする世界の誤解と憎しみである。ロランへの非難と攻撃は多くの新聞、雑誌、著述を通じて、烈しくなる一方だった。ロランはそれらの矢をまともに受けた。彼は、自分が正しいことを信じていた。また、時がたてば、ロランを非難する人々の狭量な、排他的愛国心からくる誤解が解けることを知っていた。そして、彼は自分の不動の信念が、けっして自惚れや利己主義による思いあがりでないことを、母にも理解してもらいたかった。ただし、母を慰さめ、母の心配を軽減するためにも、在りのままの事実を曲げて、詐つた報告をすることはできなかった。

戦禍のヨーロッパ、祖国が憎しみと殺戮の巷と化したなかで、ロランは、多くの、無辜の民が犠牲になることを人種や国境を越えて、思わずにはいられなかった。彼から見れば、戦勝者も敗北者もひとしく犠牲者であり、それは万人の道徳的、精神的頽廢に他ならなかった。

「…わたしにとって慰めなのは、わたしが立派な事をしたので、後になって、感謝されるだろうといってくれることです。とりわけ、わたしには自分の良心の慰めがあります。——まったく真摯にあなたにお尋ねしますが、こんどのわたしの論文の中に、およそクリスチャンの良心が同意してはならないような言葉が一つでもあ

るでしょうか？フランスの名誉にならないようなことが一つでもあるでしょうか？

わたしが自分の思想のすべてをあなたに述べることを苦になさらないでください。あなたに手紙でお知らせしたこと以外には何もありませんから。わたしは勇気に溢れています。わたしは落胆してはいません。ただしかし骨が折れるにちがいないと思っはています。——すべての立派な仕事はそういうものです。報いは後からきます。(しばしば、もういなくなつてから…)

こうした信念をもちつづけることが、いかに精神に生きる人とはいえ、ロランにとって絶えまない苦闘であつたかが伺われる。

「絶対的な精神の孤独の中で、わたしに対して積もり積つた憎しみを感しながら、頑ばつて行くのに、どんなに多くの精神力が必要だつたかおわかりになりましょう。しかし教育により、教化により、宗教によつて、つねにわたしたちに説かれてきた理想に忠実であること以外に、わたしは何をしたのでしょうか？ただしかし、試験がきてみると、他の人々にとっては、それ〔教育その他〕はことごとく単なる言葉にすぎなかつたことがわかります。わたしにとってはそうではありません……

…この絶えまない闘争のなかで、ただ一人の、ただ一人の友(友人がないわけではありませんが、話しあうことができません)にも寄りすがることができないというのは、ほとんど例のないことです。ゾラ(作家エミール・ゾラ 訳注)がほとんど全フランスを敵にまわしたときにも、彼には少くとも小数の友軍がつねにありました。わたしは、現在、より高尚な問題のために〔戦っているのに〕一人きりです。なぜかという、ゾラは防禦するというよりも攻撃したのですが、わたしは防禦するだけです。わたしは誰にたいしても、わたしを攻撃する人々にたいしてすら憎しみをいだいていません。」(一九一五年三月一四日の手紙)

「…ただしかし、こんにちわたしの敵たちの狂気じみた憎悪の念と、誠実な人々(セアイユの例)の無気力と、わたしの友人たちの拙劣さなどからみて、わたしの著書の出版はたいへんな嵐を巻きおこすでしょうから、ある程度の飽和状態に達したら、おそらくわたしは味方からも敵からも遠ざかる必要を感じるでしょう。——(もつとも、あの本を出したことをわたしが後悔していると思わないでください。どんなことが起ろうとも、それはぜつこいに必要欠くべからざることでした。どん

なことが起ろうとも、この本は後に残^りて、将来わたしに代^りて語るでしょう。わたしは未来については確信をもっています。ただし、現在は困難であるし、先もまた困難でしょう。——それにしても、なんとという例外的な立場でしょう！この——まったく単純な——態度のために、世界中に、日本にまで知られ、尊敬され、しかも自分の国では中傷され、侮辱されるとは！わたしの生涯はジャン＝クリストフのそれを凌駕しつつあります。わたしがわざとそうしたのではないことは神がご存じです！」（一九一五年一月三日の手紙）

つねにこうした高尚高潔な態度を持しながらも、ロランは、時には寂寥感を避けえない。その瞬間にこそ母の淨い愛情をひとしお強く彼は感じるのである。

「いとしい母上。わたしは少し悲しい気持で〔ホテルに〕帰りました、〔パリに帰る母を見送ったあとで〕そして懐かしいあなたのお便りをみだしました。それはわたしを幸福にしました。わたしこそお礼を申します。あなたは二カ月いらい、わたしのあらゆる苦しみとわたしの思想を共にして下さったことによって、わたしをたいへん幸せにして下さいました！わたしのかずかずの不幸をともにされた、古い伴侶のあなた……わたしはあなたの〔部屋〕の扉を開けたままにしておきました。そして寢床に入るまえに、あなたをお訪ねしました。〔母はもうそこにはいないのに！〕月は凍^つた空にかがやいていました。…」（一九一六年一月一〇日）

ロランが扉を閉めないでいたのは、母がすでに発って行った、先刻まで彼女が泊っていたホテルの部屋である。ロランと母とは、しばしば、こうして、隣の部屋にいて、扉をあけたままにして、互いに愛情にひたされていたのである。ロランの苦悩がもつとも烈しいとき、世界の憎しみが彼の上のしかかっているかに感じられたとき、母の心は、パリとスイスの山河のへだたりを越えて、息子のそばにいたのである。

この書簡集の巻頭に、マリー・ロマン・ロラン夫人が述べているように、ロランは母にあてて毎日手紙をかいたが、その中多くの手紙が検閲によって没収された。それらの内容はもちろん知るよしもない。母の心配を和らげようとして、いろいろの問題に手心を加えていることも少くないようである。この時代のロランは一人のアメリカの女性を熱愛していた。この恋愛はロランに烈しい生き甲斐と大きな苦し

みとを与えた。しかし、ここでは、ほとんどそれには触れていない。母は息子がこの女性と結婚することには反対だった。

なお、この頃に、ノーベル文学賞がロランに贈られることに決定したが、それについても、ロランを失望させたり、苛立たせたりしたエピソードがあるが、ここでは触れない。

また、ヘルマン・ヘッセ、カール・シュピッテラー、ジャン・リシャール・ブロック、ピエール・ジャン・ジュヴ、アルペール・シュヴァイツァその他多くの詩人、作家、芸術家たちとの親交についても語られているが、ここでは、ページの都合で割愛する。



《マルヴィーダとロランの往復書簡》

南大路 振 一

Ⅰ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

一八九〇年五月二十五日、日曜日の五時

私のしたしい友、私はあなたのことで不安になって来ました。あなたは万事順調で、快活で、仕合せそうに見えました。——それが突然どうしたというのです。私のほうがあなたより信頼の気持をもっています。私のほうは、今晚お会いできるにも拘らず、あなたにさし上げるつもりでこの手紙を書いているのですから。おそらく今晚はくわしく話し合うチャンスがないでしょう。M夫人⁽¹⁾のところへ来られなかったところを見ると、あなたの不機嫌がまだなおっていないことは明らかです。いまあそこで、ごったませの聴衆を前にして演奏するのが愉快でないことは、私には分かります。今日あそこを訪問したホーエンヴァルト伯爵も演奏したがりませんでした。そしてあとで私に、同じ理由から愉快でないと言っていました。

しかしあなたの場合、理由はこれだけではありません。なにか陰うつなもの、不安なものがあなたを支配しています。もしあなたが私にそれを話して下さらないな

ら——もしあなたが私に、あなたの心痛を共にすることを許して下さいなら、そしてあなたをその心痛から救うか、或はあなたを慰めるか試みさせて下さらないなら、私はあなたの友情を信ずるわけにゆきません。行為となって現われない友情はなんの役に立つでしょう。いつかヘルツェン⁽²⁾は私に向かって、「あなたは活動的な友情をお持ちだ。これだけが真の友情です」と言いましたが、私にはひじょうに嬉しいことでした。いまあなたが私に率直に話して下さいまでは、私は満足するわけにゆきません。私はあなたの内面に調和(ハーモニー)を回復することができる、とかたく信じています。あなたは私に明るい喜ばしい時だけを恵んで、あなたの不安を共にすることを許そうとはなさらないのですか？それはいけません。私はそのことであなたに腹を立てます。どうか確信して下さい——あなたのように好ましい新しい友人をえることは、もう私の生涯では滅多にありません。もしそれが起こるなら、それらの友人はいわば私自身の一部となります。そして彼らに関わることは私にも関わり、彼らと同様にこの私を喜ばせ、或は悲しませるのです。ですからどうかお手紙を下さい。私はちゃんとした、はっきりした告白を求めます。そうすれば私はすぐ治療法を見つけることでしょう。私たちに残された日々はもう僅かです。これらの日々がどうか私たちのうちに明るく澄んだ思い出を遺してくれますように。それこそ永遠の所有物なのですから。

明日はアルバーノ⁽³⁾行きをあなたに提案するつもりでした。しかし天気はまだ心配のようです。この手紙には署名なし！

注

- (1) ドンナ・ラウラ・ミンゲンティ夫人。ローマでマルヴィーダともっとも親交のあったミンゲンティ夫妻のサロンには、多くの知名の士が出入りした。
- (2) ロシアの革命家アレクサンドル・ゲルツェンのこと。マルヴィーダはロンドン亡命中(一八五二～六二)にやはり亡命中のゲルツェンを知り、乞われてその幼ない娘たちの家庭教師となった。やがて末娘オルガは彼女の養女となり、成人してフランスの歴史家ガブリエル・モノーと結婚した。エコル・ノルマルでロランの師であったモノーは、彼をマルヴィーダに引合わせた。

(13) ローマ東南の景勝の地。アルバーノ湖がある。

Ⅰ ロランからマルヴィーダへ

ローマにて
一八九〇年五月二十六日（掃宅したところで）

敬愛するマドモワゼル、あなたが私におっしゃること、またおっしゃらないことすべてにたいし、私はあなたを深く愛します。私もまた話したいという欲求をどれほど感じたことでしょうか！しかし私は、私の気持とはまるで関係のないような、冷淡なことばしか口にすることが出来ませんでした。

したい友（こうあなたを呼ぶことは私にはなかなか出来ませんが）、あなたが私の心の奥の奥まで私と同じくらいよく知っておられることを、私は一昨日は信じ、今日のはっきり知っています。それでも、あなたに私の心が読みとれたというのは、不思議なことでしょうし、またたしかに不思議です。これは私にとって信じがたいことです。あなたに覺られはしなかったという確信がありました。秘密を自分だけのものにしておこうと、私はずいぶん苦勞しました。私はあまり無口ではなかった、というのでしょうか？いや、私にはあなたが——そんなに多くを知っておられることが信ぜられません。自分で自分が頼りにならないのですから——私はひじょうに熱狂的な素質の持主で、夢想の傾向があります。

そして、話すことができたらと私がどれほど願っても、私にはまだうまく話せません、したい友よ。あなたを私自身と同様に信頼してはいるのですが——。たしかに私は秘密をもっています。しかし私には、それを漏らしてはならないように思えるのです。それは——それは他の人間に關っているからです。その女性はこの不幸な秘密について何も知りませんが、それは——彼女に關係している以上——やはり彼女の秘密でもあるのです。

ああ、私はあなたに、それはそれは大きな信頼を寄せています。しかし無意味である恋をどうしてあなたに話さねばならぬのでしょうか。

敬愛するマドモワゼル、この手紙を書いたあとで今晚お伺いするのは不可能です。
あなたを愛し、衷心からあなたに感謝するあなたの友

R・ロラン

Ⅲ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

一八九〇年五月二十七日、火曜日の朝

したい友よ、もう一言——私たちの平和な友情のちょっとした障害を葬るために。いいですか、もしあなたがファルネーゼ〔ファルネシーナ〕宮で、私に二度目の手紙を書いたと言わなかったら、私はあなたから告白を求めるといった出過ぎたことは決してしなかったでしょう。しかしあの時、あなたの様子があまりに落着かず、ひどく怒っているようにさえ見えたので、私は、なにか私の力ではどうにもならぬ不幸があるのだ、と思わざるをえませんでした。しかしすでにあなたにもお話したとおり、私の友情は活動的ですから、私はさっそくあれこれと考へ、この不幸の原因がどこにあり、どうしたらそれに対処できるかを探ってみました。そして、あなたの二度目の手紙（倦怠のことが書かれていた手紙ではありません）を読んでから推測を述べたのですが、それは誤っていました。しかしそれは、したい友よ、中途半端なことば、中途半端な信頼が悪いのです。もしあなたが、あっさり心の中まで覗かせて下さって、そうすることで、あなたが私をほんとうに信頼しており、あなたの秘密を私が神聖視することを確信しているという証しにして下さったのなら、こんなやりとりは不要であったでしょうし、ひょっとすると、あなたの心痛にたいする適切な慰めが見つかったかも知れません。そうです、今はあなたの心痛が

何であるか分かっています——私の最初の推測が正しかったのに、あなたの二番目の手紙で迷ってしまったのです。

しかしもうすんだことですから、今はまた、私たちに残された短い時がつづく間、私たちの大切な友情にもどりましょう。実は、昨晚あなたが来られるのを待っていたのです。あのお手紙があったのですから、なぜ二人でお会いしないことがあるのか、私には分かりませんでした——。

今日はアルバーノへ出かけたかったのですが、天気あまりに心配でした。私も自然が懐かしくてなりません。しかしヴィラ・マッテイ⁽¹⁾でさえ、今日は雨で台なしでしょう。木曜日になれば天気はもっと安心かも知れません。いずれにせよ明晩、私たちの水曜日にはお待ちしております。

誠実にあなたの友

M・マイゼンブーク

注

(1) ヴィラ・チェリモンターナとも呼ばれ、静かな散策の場として知られる。

Ⅳ マルヴィエーダからロランへ

ローマにて

一八九〇年五月二十八日

何という気紛れな天気！ また素晴らしい晴天がやって来そうです——つい今朝がた、まるで雨の降りそうな空模様だったのに。ほんとうに残念です。私が湖を見たがっているのを、天気^のいたずら者がこんなふう^ににからかうのです。

それで私はもう一度あなたに書かねばなりません。実のところ、そうはしたくなかったのですが、いつまでたっても誤解が尽きず、ついには以前の思い出をくもらせてしまいますから——。私は率直にお話するつもりですが、それはあなたに十分

わかってもらうためです。そこでずっと昔のことから始めますが、これは赦していただきたいのです。

ながい人生の終わり——およそ人間の心情を動かす一切のものに満ちて、私は明澄といった境地に達していました。私が真の、深い愛でもって包むのは、もはやオルガとその家族しかありませんでした。双方ともに揺らぐことなく、いささかの疑念も湧きようのない愛——そして、ひじょうに快くはあるが私たちの人生により深い痕跡は残すことのない、気持よく、しかし平凡な人間関係にだけ注がれる一般的な好意。そのうえ私は、心の痛みや苦しみに乱されることのない精神的な関心——澄みきった平穩のうちに生きていました。ある時、私は日記帳に次のように書いたのです、「私の心は万神廟（パンテオン）のようだ。すべての壁龕はもう愛する者たちの像で占められている。これ以上あたらしい像の入る余地はない」と。そこへ思いがけなく——私が求めたのではなく、またそのような人物がいるとは夢にも思わなかったのに——ヴァルスベルク⁽¹⁾が私の生活のなかへ入って来ました。最初は手紙をとおし、やがて彼自身で。彼のすぐれた知性、彼の気高い資質、そして彼の不幸は、私のなかにもう一度、友情がもつあの愚かしい熱意を目ざませました。それは、他人のために何でもやりとおせると常に思いこみ、事がすんだ後に、はじめて自分の無力さを悟るといった友情です。ヴァルスベルクの場合、私にこれを悟らせたのは彼の死です。この世にたいする私のくもりない平安をとりもどすために、私はきびしい戦いに耐え抜かねばなりません。そして私は、ともかく快適な一冬をその場かぎりの知人たちと過ごす覚悟をし、そしてそのほかは、苦痛を与えることなく私の精神を励ましてくれる偉大な思想家たちの世界で生きる決心をしてローマへと戻って来たのでした。すると、あなたが来ていたのです。はじめ私は、あなたもまた気持のよい、しかしその場かぎりの知合いだと考えました。事実、二、三回のありきたりの訪問以外にはお会いすることもなく、二ヶ月が過ぎました。やがてだんだんあなたという人間が分かるようになり、あなたが好きになりました。そして私もあなたに劣らず熱狂的で、夢想の傾向がありますから、あのヴァルスベルクが（私は彼からそれを望んだのですが）ずっと死にいたるまで付き添う好意でもって私を慰めるため、あなたを私のところへ遣わしたのだ、と思うことがよくあ

りました。そこで自分の愚かしくも情熱的な友情（と呼ぶよりほかありません）に
駆られた私は、あなたにローマを愛することを教え、また、あなたが健康を増して
快活になるようあなたを助けることに成功するかも知れない、とあらたに考えまし
た。そして私は目的を少しばかり到達したと思い、ひそかに喜んだのでした。あな
たの時としてあまりにひどい無口は、お互い言葉を必要とせず、それでいてちゃん
と気持ちが通う、あの内的な調和なのだ、と考えました。私があなたのおかげで味え
た音楽の比類ない喜びによって、私のうちには卓越した快活さ——魂の深みから笑
うこと（それを凡人たちは日常の陽気と混同しますが）のできるあの卓越した快活
さがふたたび目ざめました。私があの一時^{ひととき}をひじょうに楽しんだこと、そしてそれ
について大変あなたに感謝していたこと——これははっきり申しあげておきます。
そうしたところへ、とつぜん先週の木曜日の晩、私はあなたに変化が認められるよ
うに思いました。そしてこれは土曜日、ジェフロア⁽¹⁾のところで更に裏付けられま
した。あそこであなたは私への手紙のことを話しましたが（それは私には不可能で
した。なぜといって私はその手紙のことを知りませんでしたから）、そのとき私に
は、何かがあなたを苦しめているのがはっきりしました。そこで私は、友情の権利
でもってあなたにそのことを尋ねてもよい、と考えました。それ以来どうい
うことが起こったか、それはご承知のとおりです。しかしそれがみな私にどんな結果を生
んだか、それをあなたは夢にも知りませんでした。あなたの志操と感情の純粹さ、
気高さにたいする全幅の信頼を失なうことなど、私には想像もつきません。あなた
という人間は、どんな些細なことについても何か不正や不義を働くことは勿論、それ
を考えることさえ出来ないと思っと思っています。しかし私が失なったもの——それ
は、私たちの共通の体験を回想するあの純粹な喜びです。なぜといって、私のほう
はあなたが快活で、ほとんど幸福でさえあると思ひこんでいるのに、あなたのほう
は、何週間このかた人知れぬ苦悩を味わっていたのですから。（あなたが言うど
おり、お母様はこの苦悩を予感されたことでしょう。）私のほうが愛情のこもった
関心からあなたの健康を気遣っているのに、あなたのほうは、病気になるような仕
事を完成した——私のほうは音楽のなかで私たちの魂がすばらしく結び合わされる
幸福に浸っているのに、あなたのほうは、自分の心を満たしているものを口にしな

くてよいために演奏していた——。いいですか、このことが私をひじょうに悲しませました。昨日ヴィラ・マッテイで私は、激烈でもなければ不当でもない悲哀に襲われました。それは一切を理解するがゆえに何びとをも咎めない悲哀——事物の根底から湧き、この人生の不完全さそのものに属しているあの悲哀です。私が嘆いたのは二人の死者です——それは二度と戻っては来ません。それは一人の友と、もはや甦えることのない大切なイリュージョンです。私には、あなたが打ち明けてはならぬ秘密を知る権利はまったくありません。私は二度とそのことを口にしないでしよう。そしてそれが全く品位のある立派なことだと深く確信します。しかし、あなたのために何かしてあげられるという信念——この信念を私は失いました。あなたの友情は依然として確かですが——。けれども無に帰したイリュージョンは取り返しがたく失なわれたのです。そしてこの点で私たちの関係にはズレが生じました。しかし私は戒められたのであり、もう錯覚に身を委ねることはないでしょう。こういうふうにして、私たちはあらためて友人になりましょう。

いつものことですが、こういった議論がすぐ細くなってゆくのは嫌なことです。しかし私はあなたにすっかり真実を書きたかったのです。そこにはあなたにたいする非難はいささかも含まれていません。悪いのはまったく私のほうです。そしてその報いを受けねばなりません。あなたのほうは、あなたの心が命ずるままにして下さい——お出でになるなり、ならないなり。けれどもどうか、あなたにたいする私の敬意と愛情はこれまでと変わらないこと、ただイリュージョンだけがないことを確信して下さい。

つねに、そしていつまでもあなたの友

M・M

注

- (1) アレクサンダー・フォン・ヴァルスベルク男爵。すぐれたギリシア研究家。一八八九年、ヴェネチア駐在のオーストリア総領事として没す。
- (2) ローマの「フランス考古学・歴史学研究所」の所長。

Ⅴ ロランからマルヴィーダへ

ローマにて

一八九〇年五月二十九日

したい友、あなたはとてもお分かりになりません——たった今、あなたがお書き下さったあとで、私がどれだけ一層あなたを愛しているか（一層あなたを愛するのは、ありえないことだと私は思っておりました。今度はどうしても私のほうで、あなたが私にたいしして下さったように、誤解をとくことを試みなければなりません。しかしそれを始める前に、私が申しあげてをすべて信ずる、と約束して下さいさねばなりません。（そしてあなたがそうして下さいることを、いま私は確信しています。）私たちの間で支配できるのは、ただ真実だけです。ほかの喜びとは、慇懃な社交的な虚偽で満足するがよいでしょう。

したい友よ、あなたは昨日、ヴィラ・マッテイでわたしのことを泣いて下さいました。そして私は昨夜、そして今朝もあなたのために泣きました。いや、彼女——あなたのイリュージョン、私たちのイリュージョンは死んではいません。

敬愛するマドモワゼル、私の心の物語はお話すればすぐすみます。私はいつも孤独に生きて来ました——ほかの喜びとから離れ、家庭にあっても肉身からさえ離れて。（やっこの二、三年来、私は母を相手に独り言をいいます。）十九、二十の頃には、私は一つの信仰、一人の救済者を求める絶望的な戦いのうちに困憊しました。それと同時に、私のなかには愛情への欲求が生きていました。しかし友達はありませんでした。少年時代のこの最初の時期に私はひじょうに苦しみました。それからエコル・ノルマルで私のうちに一つの根本的な変化が起こりました。そこで私は、それ以来すべて私の喜びと悲しみを共にしてくれる一人の気高い友⁽¹⁾をえました。そこで私は、私の神、私の晴れやかな落着き、私の秘密の力をえました。そして私は自分に帰ったのです。それまで私はいつも独りで生きて来ました。そして私の個性を意識するには至らなかったのです。いま他人との接触をとおして、私自身の自我が目ざめ、それが発展しようとしているのを感じました。それ以来、私はもっと

も意気沮喪した時でさえも、私の発展を促進させようと試みました。私のうちに生きている一切を実現しようと決意したのです。そしてこれからも、力尽きて倒れない限り、私はそうするでしょう。

一人の友、一つの信仰、一つの確固たる意志をかちとった限りない幸福にもかかわらず、この学校は私に真の満足を与えてはくれませんでした。なぜなら、私がそのためには創られていない生活のさまざまな要求、片時も私の喜びとはならない仕事のさまざまな要求によって、私のもっとも根元的な天性がたえず傷つけられ、押えられたからです。ただ二人きりの孤独のうちに——私たち二人の愛する音楽⁽²⁾のうちに、自分が幸福であることを心に感じるだけでした。しかしこの喜びさえも、最終学年には完全に拒まれました。それは国家試験の準備で私たちには、この神々しい自由をたのしむ一瞬さえも残らなくなったからです。

それから突然、私はローマに来ることになります——私の思想にたいする抑圧のがれ、芸術と詩と自由の世界に。幸福はあまりに大きく、私はもはや生きているのではなく、ただ夢みているのだという気がしました。そして私の喜びを完全にするために、私はあなたに会ったのです——私の魂を読むことができ、それをいつくしみながら理解して下さり芸術と自然との楽しみで浄化された、理想的な人生の美しい夢をその魂と共にして下さるあなたに。したいしい友よ、いつか申しあげましたが、この時いらい私ははじめて本当に仕合せなのです。そして私の唯一つの心配は、それがすぐ終わる夢にすぎなかったかも知れない、ということです。ああ、私は仕合せでした、完全に仕合せでした！ どうか信じていただきたいのです、私はけっして喜劇を演じたものではありません。そしてもしあなたが(私の黙っている間)私の目のなかに、あなたの側にいるたびに私がいつも心から満足していることを読んで下さったのなら、そして今もお読んで下さるのなら、どうか私のその目を信じて下さい。それは偽りはしません。しかししたいしい友よ、私が北方の人間であり、これまで多く苦しんだことをお忘れにならないで下さい。人はその天性をそんなに突然否定することはできません。南方の詩の最初の甘美な夢が消え去ると、私は自分に帰りました。私の個性と、それを発展させようという願望があらたに目ざめました。そしてその結果、ふたたび生活のさまざまな要求を苦痛をもって意識するこ

ともになりました。しかし魂の深みには、私は私の晴れやかさを保ちつづけました。苦悩はその表面にふれたにすぎません。あなたと一緒にいる時、或は、音楽そしてまた自然のなかにある時、私はいつも完全に仕合せです。私はあなたに、自然のなかでの神聖な自己忘却についてお話しなかったのでしょうか？ どうか確信して下さい——あなたの許にある時、私は神における魂と魂の結合という測り知れない仕合せだけを考えているのです。私にとってその仕合せは、あらゆる宝のうちでの至高の宝なのです。

ですから、あなたは私に何を非難なさることがあるのでしょうか。あなたに私のちよつとした心配ごとを打ち明けなかったことでしょうか？ 私はあなたの魂の大切な平安を乱すことを恐れたのです。そして私自身、このような不快な気持を軽蔑していました。ですから、どうしてあなたに話すことがあったでしょう。それとも、私の心のなかに忍び込んだ、あのひそかな恋について何も言わなかったことでしょうか？ したい友よ、私が言わなかったのは、私自身あの恋のことで自分を責めていたからです。そしてすでにあなたに申しあげたとおり、もし——あなたはもうご存知の——この秘密が私だけのものであり、私だけに関わるものでしたら、私はためらいはしなかったでしょう。しかし私には思えたのです——私の愛するその人は、自分ではこの愛のことを少しも知らなくても、私のほうでこの愛を（もつとも親しい友人たちにさえも）秘密にしておくことを要求する権利がある、というふうに。——しかしともかく、あなたに心奥深くまで覗かせなかったこと、私の思想がどんどん発展してゆくのを殆ど知らせなかったことは事実です。自分のなかに閉じこもるという以前からの習慣が私にそれをさせませんでした。その上、あなたを非常に愛しているだけに、あなたの下される判断が不安だったのです。そしてもう一つ、これを言うのは非常にいやなことです。私はあなたの友人たちを少しばかり嫉妬していました。そして自信のないままに、あなたのあらゆる好意にもかかわらず、私があるあなたを愛しているほどには、あなたが私を愛していて下さらないのでは、といつも心配していたのです。

したい友よ、私にはあなたと、私のシュアレスとしかありません。それ以外にはこの世に友人はありません——私の母と妹のほかには。ですから、あなたからの

信頼のないことで、どれほど苦しんだことでしょう！（……………）

いいえ、私はもう何もあなたの前には隠さないでしょう——あなたは、私があなたを愛しているほどに、私を愛して下さるのですから、そして砕かれたイリュージョンの代りに、いまは——願わくは！——一つの現実があらわれたのです。どうか私のことばを信じて下さって、私についてお考えになることをいつも率直におっしゃって下さい。私には、この私がヴァルスベルクからあなたへの遺産であるのかどうか分かりません。しかし私が自分からすすんであなたに愛を贈ったことは、私によく分かっています。

誠実にあなたの

R・ロラン

注

- (1) 後出のアンドレ・シュアレス（一八六八～一九四八）のこと。
- (2) エコル・ノルマルでは、ロランとシュアレンは一緒に音楽に興じることがよくあった。

Ⅶ マルヴィーダからロランへ

ローマにて

一八九〇年五月三十日、金曜日

したしい友、こうして手紙がもう一通来ました。しかしそれは好ましく喜ばしい諧音（ハーモニー）にみちたフィナーレです。あなたが帰って行ってから、私はあなたの手紙を読み、心をこめて「お休み！」のあいさつを送りました。たぶんあなたに平和な眠りが訪れたことと思います。これで私たちの間は、すべてははっきりしました。もう私たちを引き離したり、不安に陥れたりするものは何もありません。間近に迫っている空間的な別離でさえも——。なぜとって、私はあなたを心のなかに宿しますし、私もあなたのなかに生きつづけることを知っていますから。あなた一人をここに残しておくことは、私にはひじょうに辛いことでした。そのことも

あつて私は出発を延ばしていたのです。しかし人生のさまざまの要求に所詮は従わねばならない場合、心のなかに避難所——そこではすべてが光り、輝き、揺らぐことのない避難所があるなら、すべてに耐え、すべてに克つことはより容易になります。

この最後のお手紙であなたが自分を示した、そのとおりのあなたを私も期待します。つまり、北方の人間として自己の個性を力づくよく発展させ、そして南方の神々しい美のうちに詩人に成長するあなたを——これはファウスト的な道ではないでしょうか？ そのようにしてファウストは行為の人になったのです。善を成就し、理想に溢れる志操でもって——ちょうど太陽が自然の祝福として光を放射するように——感化する、行為の人です。これがあなたの将来です。私はこのことを予言しておきます。そして、こう考えることで私は幸福です。なぜと云つて、世界は理想を宣べ伝える使者たちを必要としているのです。そしてその理想こそ、いつか人類を、神のうちにより深く根ざす生へと結び合わせる光明となるのではないのでしょうか。（…………）

私は他の人間にたいするあなたの影響について、ちょっとした願いをもう二つ、三つ話し合いたいと思います。——ご機嫌よう、したい友よ、では天氣がよければ明日また。

あなたの友

〈 訳者あとがき 〉

ローマ留学時代（一八八九～九一）のロランは、毎週いちど——最初のうちは水曜日の晩に——マルヴィーダ・フォン・マイゼンブーク（一八一六～一九〇三）を訪れるのを常としたが、二人はまたしばしば——時には毎日のように、手紙を交わして語り合った。それは稀有な「魂の記録」である。

ここには、マルヴィーダのすぐれた研究者であり、ロランとも親交のあったベルタ・シュライヘア女史が彼自身の協力のもとに訳編した『或る往復書簡』(一九三二)から、とりあえず六通をえらんでみた。したがって、ロランの手紙はドイツ語からの重訳であることをお断りしておく。(一九七四年五月)。



『愛と死との戯れ』の講読を終えて

波多野 茂 弥

一昨年の秋であったか、ロマン・ロランの作品の原書講読をはじめることになり、「ぜひ戯曲を」という希望に応えるべく、最初のテキストとして『愛と死との戯れ』をとりあげた。

月に2回ずつの予定が、私の多忙のために、1回しかできない月もあったが、それでも去年の入梅の頃には、あと一息のところまで漕ぎつけた。そこで、最後の締めくりとして、7月には3日間連続の勉強会をもった。暑いときに、これはなかなかの強行軍であったが、それまで何度も間をおいて少しずつ読んできたこの作品の全体的な流れと広がりを見定め、把握するためには、どうしても持続的な集中が必要であるところから、あえて提案し、実行したことであった。

私としては、つとめて冷静客観的に、語学モニターの役割を果す一方、戯曲を読み込む上で欠かせない事柄だけを指摘し、説明していくつもりであった。というのは、いわば基礎工事を手伝うことが私の引き受けた役割であり、それが終わったあとは、参加者各人の自由な読みかたこそ、何にもまして尊重されねばならないと考えたからである。しかし、読み進むほどに、私はこの作品の魅力にまたしてもすっかり捉えられてしまった。フランス語による上演時間にしてせいぜい1時間半の、この一幕の悲劇がもつ格調高い美しさはどうであろう。また、そこに含まれている人間的・思想的内容の、なんとという豊かさであろう。ソフィーの、ヴァレーの、そしてジェロームの、まさしく悲劇的なたたかいを、私自身の内部に生きながら、各瞬間・各人物のうちに見出される動かしがたい真実に、私は深く打たれる。……そんな次第で、私はつい感興の赴くままに自分の役割を忘れ、脱線に脱線を重ねることも一再ならずであった。この点、能力不足の上の準備不足とは別に、いまになって些か気がとがめているが、ロランの傑作『愛と死との戯れ』に免じて赦していただきたい。ともあれ、参加者のみなさんが、訳書から感じとれる以上のものを、幾らかでも得られたとすれば、私にとってそれに過ぎるよろこびはない。

1974. 6. 14.

シュテファン・ツヴァイク「ロマン・ロラン」から 《愛と死との戯れ》について

三木原 浩

ロマン・ロランのフランス革命劇連作の一つ「愛と死との戯れ」の冒頭には、次のような献辞が見られる。

全ヨーロッパを祖国として愛する心と、
友愛の宗教とを持つ
かわらざる精神の友
シュテファン・ツヴァイクに
私は親愛の思いをもつてこの戯曲を捧げる。
この作のできたのは彼のお蔭である。

(片山敏彦訳)

ところで、その当のツヴァイクは、この作品に対して、どのような評価を与えていたのだろうか？ 彼は、彼の「ロマン・ロラン」論補遺の中で、そのことに触れている。

まず彼は、ロランが、この作品「愛と死との戯れ」において、かつてなかったほどの強い劇的効果を示し得たことを指摘する。それは、劇作手法上の成果を意味するものであり、彼ツヴァイクは、それを次の二点に要約する。まず第一としては、すべての状況、事件、行為が、——それらは、どれほど大きな広がりをもって、一見複雑に混り合っているかのように見えることか——《ただ一幕の中で》急速に

高揚され、凝縮され、そしてついには最後の大団円。ツヴァイク流に言うならば、最後の《悲壯な（英雄的な）一時間》の中に、見事なまでに収斂されているということ。そして第二点としては、その収斂されていくまでの過程において、《諸々の運命は相互に……しのぎ合い》、その運命の諸相を担う一人一人の登場人物の中に、ロランによって《自由に創作された諸事象》と《歴史上の諸要素》とがすばらしくも結合調和されているということである。——例えば、ジェローム・ド・クルヴォワジェは、天才化学者ラヴォワジェの特徴とコンドルセの魂の偉大さとを分かち持っている。またジェロームの妻ソフィーは、コンドルセの妻を思い出させると同時に、ルーヴェの勇敢な恋人を彷彿とさせる。さらにカルノーに関しては、以上とは別に、実に厳密に歴史的眞実にのっとり描かれている、等々の点。

次にツヴァイクは、作品全体を支配する精神的な雰囲気——それは《われわれに分析することのできないもの》であるが——を指摘し、その中こそ《全き眞実よりも更に眞実であるもの》を感得している。それは、実にわれわれを震撼させる《眞実》ではある。なぜなら、《知性的な人々、道徳的な人々が、自分たち自身の思想によって流された血を前にして感ずる恐怖、革命ならなんであれ突進させるために必要ではあるが、その後には殺戮の陶酔の中で、すべての理想を呑み込んでしまうという人間の獣性の最も低劣で最も卑劣な本能に対する恐怖……さまざまな感情から来る戦慄、（死の）恐怖に捉えられた若い生命の永遠にして不滅の戦慄……魂も肉体も不可解な暗い力の支配下にあるという状態の全き耐えがたさ……》等々だからである。それは、過去、現在を通じていつの時代にも存在する《愛と義務、職責とより高い段階での眞実との間》における悲痛な矛盾、葛藤を指し示すものである。

更にツヴァイクは、この戯曲の文体が持つ特質に言及している——つまり《詩的簡潔さと、その悲劇的旋律の純粹なリズムの流れとの故に、一篇のバラッドを思い浮かべさせられる》と。

以上述べた事由を挙げた上で、彼ツヴァイクは、この作品を次のように、実に明解に断定する——《……「愛と死との戯れ」は、戯曲的且つ芸術的な観点において、ロランが今までに仕上げた最も完璧なものに属している》——と。

ソフィーを中心に

森 孝 子

『愛と死との戯れ』は、ロランの連作戯曲「革命劇」のうちの一つで、これもやはり、フランス革命の時代の人間の悲劇である。しかしロランがこの戯曲の序文の中でも言っているように、彼がこの連作の全体の構想をもったのは、この戯曲を書く二十五年以上も以前のことであり、また、この戯曲とこの連作中での前作に当たる『七月十四日』との間には、およそ二十年の隔りがある。そのせいか、この作には、これ以前の四編の戯曲とは少し違った点があるように思える。

その一つとして考えられることは、（そしてこれがこの作全体の性格に大きな影響を及ぼしているのであるが）この作においては、主人公達が、一つの立場や主義を代表する軍人や政治家（*homme d'Etat*）ではないということである。実在の人物、化学者ラヴォワジエと思想家であり数学者でもあったコンドルセをロラン的な意味でモデルとしているというジェローム・ド・クールヴォアジエは、国民議会の一員ではあるけれども、本来は、純然たる科学者である。そしてとりわけ、もう一人の主人公は、軍人や革命の指導者でないばかりか、革命に直接携わらない一人の女性である。もちろん、これまでの革命劇の中にも女性は登場している。けれども彼女らは、軍人や、革命家や、政治家である主人公達との関連において存在していたのであった。しかしこの『愛と死との戯れ』では、むしろ、この女性である主人公ソフィーの内面の《悲劇》が戯曲全体の主軸になっている観がある。その《悲劇》は、一つの政治的立場、原理、あるいは一国民、一社会の悲劇ではなく、個としての人間の魂の中に繰り広げられる《悲劇》である。そしてそれ故にこの《悲

劇》は、この戯曲の《時》がフランス革命の時代であり、人物や事件が当時の史実にヒントを得ているとはいえ、まさしくそれが個的な魂の悲劇であるという理由で、ソフィーという一つの魂、革命という一つの時代を越えた、より普遍的で、より「永遠」な、人間共通の《悲劇》なのである。そしてこのことが、この戯曲全体に、真理によってもたらされる一種の精粹さと崇高さとの印象を与えている。ソフィーの魂の中のこの《悲劇》は、「革命」の時代にも、それ以前にも、それ以後にも、常に在ったし、常に在る《悲劇》である。その《悲劇》とは、ソフィーの台詞の中に見られるように、《義務》(devoir)と《情熱》(passion)との闘争の悲劇である。言いかえれば、ソフィーに、自己自身への《義務》をあくまでも遂行させようとする、彼女の中の意志の力と、是非もなく、盲目的に、瞬間的忘我の状態へと彼女を持ち上げて、どことも知れず彼女を運び去ろうとする《情熱》との闘争の《悲劇》である。

ソフィーにとっての義務とは、第一にヴァレーが生きて自分を愛していると知った瞬間から、彼女の内にわきおこった意志と願望とに従うこと、つまり、ヴァレーを救い、彼女を生きさせること。そして、彼女がかつて全く自由な気持ちから自分を与えた夫のジェローム、彼女に対して常に正しかった彼から、自己の内の情熱に駆られて自分をとりあげて、自己の人間的価値を低めないことである。それ故、ソフィーにとっての《義務》はすべて、彼女自身の中に自然発生的に、一つの欲求として生じたものであって、他から彼女に強いられたものではない。(但し、そのために悲劇の度合いは一層増す。)この義務は、彼女が自分自身のために果たすべきものである。彼女が彼女自身であるために、どうしてもそうせずにはいられないのである。

ヴァレーを救うということは、取りも直さず、ソフィーが自分自身を救うことである。ソフィーの生はヴァレーへの愛で満たされた。(「彼は私の人生のすべてでした …」《第一場》)その愛の対象であるヴァレーを救うことは、即ち彼女の愛そのものを救うことであり、延いては、その愛に満たされた、彼女の存在、彼女の生自体を救うことである。その故ヴァレーを救うということは、ソフィーにとって自分自身にどうしても果たさなければならぬ《義務》となるのである。躊躇なく

この義務を果たそうとするソフィーの内に、もう一つ別の願望が生じる。ヴァレーの激しい愛の告白によって自分の内にわきおこった情熱にはげしく揺り動かされたソフィーの中に生まれるもう一つの願望、ヴァレーの命を救うとともに、彼女自身がヴァレーと共に、彼との恋の中で生きつづけたという望みがそれである。この望みのために行動すれば、彼女は、人間的存在として自ら果すべき《義務》を忘ることとなる。自分自身の自由な意志で、自分に対する全く真実な気持で、かつてソフィーは夫ジェロームに自分自身を与えた。夫の信念を自分の信念とし、夫の正しさを自分のそれとして、常に彼女は、夫に対する変らない愛情（affection）を持ち続けてきた。そこには、何らの偽りもなかった。にもかかわらず仮にこのソフィーがヴァレーと共に逃れるために、夫ジェロームと彼との生活とを捨てるならば、彼女は彼女がこれまで守り通してきた生を、これまでの彼女自身を成り立たせていたもののすべてを、彼女自身を失なうこととなる。ヴァレーを救うことによって救い守ることとなるはずの彼女自身の生を失なうこととなる。すべてを、自分自身をも失なっても、彼女の心情をとらえる願いのために、盲目的に情熱に身をまかせるか、それとも、自分に与えられた生を、あくまでも自分自身として守り通すか、この選択のなかにソフィーの《悲劇》と苦悩が——そして人間共通の《悲劇》と苦悩が——ある。

結局のところ、彼女は、後者を選んだ。ソフィーはヴァレーに向ってこう言う。

「私達が恋に苦しまずにいるということはできないとしても、恋のおもちゃにならずにいることはできますわ。」（第三場第十一景）この選択によって、彼女は、自己の情熱の玩具となることからものがれ得るのである。彼女にこのような苛酷な選択を強いた「運命」の前に、まっすぐに顔を上げて、夫ジェロームと共に、凜として、しかも穏やかに、晴やかに、死に赴くのである。

ここに序文の最後の言葉が生きてくる。

「一すじの光のために私の命を！——私はそれを失う。私はすでにそれを得ているのだ。」

「愛と死との戯れ」勉強会に参加して

渡辺道子

私は不勉強で、「愛と死との戯れ」の時代的背景や歴史的事実をあまりさだかに知らない。ただ、翻訳本は短い文庫本でもあったのか一気に読んだのを記憶している。

今回原文で読むセミナーに全部出席できなかったのはとても残念だが、とびとびに出席した感想文をここに記す。序文の中で、いい文章に度々出会った。翻訳本では、ただつらつらと読んでいた文章が、一語一語分析されるとあゝここはこういう意味だったのかと新たな感慨が随所に生まれた。また難解な所が波多野先生の注釈により、あたかも氷片が春の光に解けていくようであった。訳文だけでは味わえない単語の一つ一つが、まるで料理名人が美しく魚を造りして皿に盛りつけた感を受けた。他の作者の仏語も少しみたことはあるが、こんなに一つ一つの単語が選択され、吟味されている文章には出会ったことがなかった。さすがロランの文章だと思った。今セミナーで講読している「ピエールとリュース」についてもほんとうにその感を強くする。だから少しでも仏語をおやりの方は、このセミナーに出席されると訳文とは異った原文の良さ、又つみみがしてしまう文章などが解ると思う。少しでも難解の文章が分ったときの嬉しさは、又言うに言われぬものがあり未熟なら未熟なだけに醍醐味がある。絵の展覧会をいいなと素通りして見るのじゃなく、丁度少しだけ一つ一つの絵の意味することが分って絵を觀賞しているようなものだと思う。会の雰囲気も主婦あり、学生あり、勤人ありでとてもユニークな勉強会であり内容が高度な割に、気楽に聴講できる特典もある。最後に相浦さんのお手製のお菓子のおいしいこともつけ加えておこう。何だかテレビのコマーシャルのようになった。

「愛と死との戯れ」を読んで。

福島光章

私が京都に来て、ロラン講読会に参加したのは、昨春であった。ロラン友の会が京都で活動していることを聞知っていた私は、躊躇いもなく門戸を叩いた。毎月2回のロラン原書講読会を知ったのは、その時であった。全くの文盲の私は、この機を利して仏語を読んでみようと思った。そして、相変わらず読めず、辞書を片手の悪戦苦闘で、臚げな怪しいものである。けれども、戯曲の専門家であられる波多野先生の、登場人物の心理や、見逃してはならない何気ない対話の意味、そして、用いられる衣裳としての言葉の美しさの指摘は、文学をいつも寝ながらにしか接しない私に、その真髄とはこういうものだ、と論じていた。そして、座を囲んでいる人々の暖かい心遣いで、無知の私を迎えてくれ、今日まで参加させていただいて感謝にたえない。

こうして、昨夏までに、「愛と死との戯れ」を、読み終えた。

この作品の舞台は、フランス革命期で、外は春、民衆は咲きほこるリラの花に甦える春を讃え幸福という疎遠になった言葉を取りもどし、東の間の喜びを友と分けあいながらも、永い間の革命と戦乱、さらにまさに始まっている恐怖政治の中で、寒さと飢えに蝕ばまれ、公安委員会の人喰鬼たちに、いつ捕えられるかという不安に戦き、かりそめの幸福に、生の永遠を託す諦念をいただいている。その死への諦念のためにか、かえって、いっさいを呑みつくそうとする情熱や卒直さで、「自分は一切を賭ける。」目前の永遠のために、憎しみ、喜び、愛し、死ぬ。生への限りない追悼者たちに、逆境の中を生きぬく力強い生命力、そして、なかんづく、自分を偽わることのできないたまさかな落ち着きを感じざるを得ない。かつて、どれほどの人が、自分に対し真摯でありえただろうかと自問する。生の裏側の死を意識せざるを得ないという不幸が、魂の解放を呼び、心の平和をかすかに保ち、一切の賭け

が、自己において勝つのである。さらに、この事は、美談として語られる類いのものではなく、良心のある民衆の中で日常具現されていることに、はっと驚かされるのである。そういう宿命をもつ人間に、哀れさと同時に、ほんとうの愛を感じずにはおれない。

この戯曲のもう一つのモチーフとして、愛とは何かを問うていることは、興味深い。ソフィーは、若い恋人ヴァレーと逃亡することを断念し、夫ジェロームと死を選ばなければならなかった。おそらく多くの女性は、若い恋人と逃げてしまった方が人間味のあるものだし、自分もそうするだろうと考えるのであろう。だが、愛を誓った夫の、あの暗黒の社会の中で真に生きるために、死を決意している姿を、敢然と無視し得る女性は、どれほどいるのだろうか。おそらく、多くの場合、悲恋を選ぶのではないだろうか。だからこそ、できないからこそ、逃亡することに人間味を覚えるのであろう。しかし、赤裸々な人間の心は、厳しい現実の中ではこうなのだろう。そして恋の近視眼に対して、愛は、決して捨てないものであるという一つの遠視眼であることを例証したのではないかと思う。恋を断念する哀れさがこの愛によって償われることで、かろうじて自己を偽ることを救っているのである。道徳論的いやらしさを与えていないのは、本当に精一杯に自分のすべてを賭ける愛すべき人間の心の音楽が流れているからなのだと思う。そこに、ロランの真実に対する厳しさと優しさを感じる。

想　い　出

相　浦　綾　子

春浅く校庭の桜もまだ芽ぶかない頃、卒業生を送るための予戯会が行われるのが、その当時の母校の習わしであった。『青い鳥』『リヤ王』など、他のクラスのだしものが無難なものだった中で、私たちのクラスはロマン・ロランの『愛と死との戯れ』を演ずることにきめ、担任のM教授に報告した。

時あたかも『太平洋戦争』のさなか、国をあげて戦争遂行に協力させられ、英語は敵性語として女学校の教科から削られたりした時代である。私たち学芸部委員も、当然M教授のきびしい叱責と不許可を覚悟していた。ところが、M教授はいともあっさりこの演目を認めて下さったのである。私たちはとび上ってよろこび、工夫をこらして『愛と死との戯れ』の演出にとりくんだのであった。

今から思えば、しんそこからのリベラリストであったM教授にとって、当時の軍国主義の風潮は耐えがたいものであり、私たちに『愛と死との戯れ』を演じさせることで、せめてもの抵抗をされたのにちがいない。このことで校長との間にトラブルもあったと耳にしたが、若い私たちはM教授の苦衷を思いやるよりも、自分たちの選んだ革命劇をやれるということに、心を昂ぶらせていた。

片山敏彦訳の岩波文庫本は伏せ字だらけで、殊にジェロームが議会のようすをソフィに語るころなど、意味もまともにとれないほどひどい削除をされていたけれども、私たちのこの劇にかけた情熱が、成功をもたらしたのか、予戯会当日は大変な人気をとり、上演に反対した校長さえも、拍手を惜しまなかったほどであった。

あれから30年、ジェロームに扮したYさんは医学の道に志して文科を去り、ソフィのMさんはクラスでいちばん早く結婚して良妻賢母に、ヴァレーのSさんは生粋の神戸っ子で魅力のある女性だったが、胸を病み、戦後誰よりも先に他界してしまった。カルノーのTさんは弁護士の夫君に先立たれ、女ひとり生きる道を模索して、今は大学出の男子社員多数を抱える堅実な会社の社長さんである。ベイヨーのNさんは高校の国語教師として活躍、オラーズのHさんは真宗の寺に嫁いで坊守と

なり。壇家の人たちに歎異抄を講義するあけくれとか、ロドイスカの Fさんは戦後の混乱期に消息を断って不明。早生れでいちばん小さかった私はクロリスに扮し、当日の記念写真の中でも子供っぽくうつっているが、戦後日仏で宮本先生のお教えを受け、ロマン・ロラン友の会ができて入会し、以後長年月を結婚・育児等で中断しながらも、浅からぬ縁に結ばれて、再びセミナーの一員として、多くの得難い友たちと共に学びうる幸せを感謝して今日に至った。

波多野先生の御指導で一昨年秋から『愛と死との戯れ』をフランス語で読むことになり、私もそのグループに入れていただいて、忘れていた単語や文法を辿りながら、あの悪夢のような時代をロマン・ロランによって支えられて生きてきたあの友、この友の上に思いを馳せずにはいられない。

“若くして枯れてゆくリラの一枝を、と望んで、夫ジェロームと共に静かに最期の時を迎えたソフィ役あの Mさんは幸せな家庭生活の中で永らえ、”どうしてもいやだ、死ぬのはいやだ、と叫んで、愛するソフィからさえ離れ、生きるために逃亡していったヴァレー役の Sさんが、若くして逝ってしまったということは運命の皮肉であったのだろうか。

あの時、リラの花が手に入らなくて、代りに舞台に飾ったフリージャが咲き乱れる今、思い出はつきることなく私の胸によみがえってくる。

一九七四年三月

モンパルナスの思い出

宮 本 エイ子

さくらんぼ、口の中がかみしめるには、まだかたくて、青っぱい、すっぱい味・
 かわいい葉をつけ始めたもみじ、その若葉たちを照らすおだやかな光に春はいつそ
 う色つやを増し、生気に満ち溢れてくる。わたしにとってそんな感触と色合いに満
 ちた日が五月一日です。一九七二年、五月一日、パリ、モンパルナス通り八九番地、
 そこで彼女と交わした一瞬間の会話になつかしく思い出されます。
 管理人のいない建物のうす暗い階段を登ったところが中二階、日本ふうにいえば二
 階に、彼女の住まいがあります。あまりにも質素なこのアパルトマンが、かつて所
 用でヴェズレーからパリに出てくるロマン・ロランが足溜まりにした住居だった
 とは、誰も想像できないでしょう。それが今では研究所であり、ロマン・ロラン友
 の会の事務所でもあり、またマリー夫人の住まいともなっています。五月一日とい
 えば、わたしはすぐメーデーが思い出されます。世界の歴史からみると、メーデー
 はわずか百年足らずのことのようです。フランスでも、この日を国民的な祝祭日と
 みなしたのは第二次大戦の後の一九四七年からだそうです。しかし、この日に行な
 われるもっと古い、ロマンテックな風習があります。人々は今ではこの日を、「ス
 ズランの日」と呼んでいます。長かった冬がやっと終って、待望の春がかえってき
 たことを告げるのがこの花です。この日のために、若者たちは、スズラン摘みに森
 へ出かけ白い可憐なこの花を小さい花束にして、愛する人 親しい人々に贈ります。
 花言葉は、「幸福を取りもどすこと、自分の気づかないやさしさ、純粹さ、デリカ
 シイ」を意味するそうです。パリでは道端でも、地下鉄の出入口でも、公園のま
 わりでも、子供や、若者や、老人が幸福を売りものにしてしています。この日、この花
 は、誰でも、どこでも売ることができるようですね。おのぼりさんのわたしには、

それはもの珍しく、また、一束のスズランを買うことによって、ちよっぴりパリジェヌを気どってみたい気がします。すばらしいさつき晴れのパリで、スズランの薫りに誘われて、わたしはパンションからほんのひとりのリュクサンブール公園をひと廻りして、道草をしながら住まいにいちばん近い小さな花屋へ寄りました。店は四、五人のお客と、色とりどりの花であふれるようでした。よく肥った中年のおかみさんが、一人で愛想をふりまき、汗をふきふき、立ち働いていました。一人の婦人はスズランのみごとな花束を買いました。他の人々は、それぞれ、柄のついた装飾的な籠に入った鉢植のスズランを求めて、満足そうに店から出て行きます。やっとわたしの番がきました。わたしは、なんとなく夢をさそうような籠のスズランに、心をひかれて、つい、「これがいい。」と言ってしまいました。「でも、いくらかしら？」三八フラン！まあ！高いこと！でも仕方ないわ。パリの花は高いのだから、花束を贈るとなると少くとも二十五フランはかかるでしょう。少し目につく花だと五〇フランはします。ロラン夫人にお贈りするのだから、私の夫もきっと無駄になる事だとは、思わないでしょう……。

その花屋を出たとたんに、わたしは、街の歩道で二人の少年が、スズランを売っているのに気づきました。ノッポとチビの少年で、道のわきに、たったいま摘んできたばかりのようなスズランの花、しっとりした黒い土をつけ、朝露が葉からこぼれている新鮮な花をむぞうさに、畳半帖ほどの地面いっばいに並べています。花屋のように恰好よくアレンジしているわけでもなく、セロファン紙も、リボンもあるはずがありません。しかし、深い森の香が漂い、不思議な自然の生命の息吹きを放っています。わたしは、花屋の籠を手にしたまま、そこへ、しゃがみ込んでしまいました。若い女の子も、中年のおばさんも、足をとめています。二人の少年は、客を呼びはじめます。初めは小声で、「安い安い、あちらの花屋よりも、もっと安い」その中に、だんだん、熱が入り、調子が高くなります。とうとう商売がたきを発見した花屋のおかみさんが、辛抱しかねて、自分の店のお客さんも、おいてきぼり、店から、とび出してきます。エプロンを両手でまくしながら、まっ赤な顔をして、「どいて、どいて!!あんたたちは商売の邪魔をする気なのかい?!あっちへお行き!!」どどなり散らします。少年たちはびくともせず、平気なもの。おかみさんはじだん

だをふんでくやしになります。とうとう、ひどいけんまくで、相手をけつとばさんばかりの勢いです。びっくりしたのかノッポの少年は、両手にもてるだけのスズランをつかんでかけ出します。肥ったおかみさんは息せき切って、少年のあとをおっかけます。チビくんは、知らん顔で、若い女の客や私を相手に、あきないをつづけています。このとんだハブニングに道行く人も足をとめにやにやしながら成り行きを眺めています。わたしも愉快な見物の一人でした。そして、わたしはチビくんたちを、応援する意味もこめて五、六本。しめて、二フラン半の花を求め、それを手にしてゆっくりとした足どりでパンションに戻りました。

さて、今夜は五時半、お夕食に、ロラン夫人から招かれています。たそがれの中を、わたしは、花屋の籠と、二、三本の切り花を紙に包み、心はずませて急ぎました。一息に階段を登ってベルを押します。扉を開けにきたのは、ロラン夫人でした。ちらりわたしを見たかと思うと、「ボンジュール」を言うひまもわたしにあたえないで、彼女はわたしに言いました。「あなたは、まちがっています。(Vous avez tort !と。わたしはなんのことだか、わけがわからずボカンとしました。そしておそろおそろ、「時間をまちがえたのでしょうか?」と尋ねます。「いいえ、時間ではありません! その花です! そんな高価なものを買ってこられたことです。それがまちがっているのです。あなたは学生です。そしてわたしたちの重要な同胞で友人の宮本氏は、京都にロマン・ロラン研究所を創られました。そのために、彼は、ずいぶん多額のお金を使ったにちがいありません。だから、そんな高価な花などを買って来るべきではなかったのです。まあでも仕方ないわね、早くお入りなさい。」と言って、彼女は、いそいそと台所へ行って、コップに水を入れてきました。「さあこれはその切り花のためです! 鉢はそこへ置きなさい。」それからロラン夫人はただ一言「ありがとう!」と言われました。わたしはこのスズランのことで、ちよっとショックをうけました。わたしは、かつてロラン夫人が、宮本に話されたひとつのことを思い出しました。ロラン夫人のお母さんは、若いころに、ロシアの将校だった夫を日露戦争で失い、幼い子供をかかえて苦勞をされたので、質素な生活を好み、いっさいのぜいたくを好まれませんでした。わが娘からの贈りものでも、それが、高価な品であると知ると、たいへんごきげんが悪く、そんなぜいたくをし

てはいけないと、たしなめました。それで、その価格の半分くらいで、たいへんわり安でしたと云うと、お母さんは、それならよかったと、気嫌を直してよろこばれたそうです。いつもは研究所の事務所である室でわかあつらえの小さな食卓につき、夫人と向いあつて座って、質素なお手料理をいただきました。すでに、夜のとばりがすっかり町をおおい部屋の小さなあかりだけがわたしたちを照らし、静寂の中で、少しかん高い特長のある彼女の声が、わたしの気持ちをふしぎに、わが家にいるように落ちつかせるのでした。



ジャン・クリストフを再読して

織田和夫

〈ジャン・クリストフ〉を最初に読んでから、ちょうど二十年がたちました。今度、全巻を大急ぎに読みかえしましたので、感想を少し報告してみたいと思います。かれんな花草もよりの装幀の、知性と気品が感じられる小さな本のシリーズ——みすず書房から出ているロマン・ロラン文庫によって、僕は最初にロマン・ロランへ近づいたのです。

この小さな本は許されたこづかいで手に入るということもありましたが、僕がもっともひきつけられたのは、〈ジャン・クリストフ〉の巻頭に飾られたロマン・ロランの肖像写真でした。偉大な人が、天空からの光を受けて、じっと前方をみつめている。その目は、世界のすべてを知りつくしているようでありながら、明るく澄んでいる。堂々としていて優しさがあふれている。その名前のひびきとともに、すばらしい人にちがいない。こんな印象を僕は受けたのです。

その頃の僕は、父はすでにいなくて、母には、クリストフの母のルイザのように、難しい相談ごと、心の悩みなどは話してもむだであろうと決めこんでいました。それゆえ、この物語で幼いクリストフが、数々の苛酷な体験をし、悩み、苦しんで生きている姿の中に、自分と共通する心の問題を発見したのです。たとえば、小さなクリストフが、母親が料理女として働いている先で受ける不当な辱めは彼に《人々のなかには、命令する人々と服従する人々が存在し、自分の家の人々も、自分自身も命令する人々に属してはいない》ことを知らせ、そして彼の全存在は反抗して立ち上り、最初の危機をむかえます。翌朝クリストフが目をさましたとき、昨日とちがう今朝の光に気づき、不正というものを発見します。また他人の悪意をはじめて知ったクリストフは《自分が全世界から迫害されているように思い込む。そして自分を支えてくれるものが何ひとつない。もう何もない!》とさえ思いました。

当時、僕もまた同じような心の苦しみからロマン・ロランへ近づいたのです。そして《生きることは苦しむこと。たたかうことだ。苦しむとたたかいとを凌いで行くことによってのみ一個の人間になれる》というロランの言葉は、僕にとってショックであるとともに、苦しいときの支えともなる励ましの言葉でもありました。

またこれらとは対照的なゴットフリートの存在。平和な自然が生まれかわってあらわれたようなゴットフリート！僕の大好きな人物であり、また心の別の支えでもありました。それからからだ全体で感動を受けつつ読みおえたアントワネットの物語……など。全体を読み終えたときの嬉しかったことは、生き生きと記憶に残っております。しかし〈広場の市〉の文明社会批評では、なんと難しいことがいっぱい書いてあることかと思ひ、また最後に聖クリストフが彼の肩に〈子供〉をかっついて河を越える話は、難しくてわからなかったように思います。

次に、今度再読し終えて、当然のこと、さまざまなことに気づきました。前にはあんなに読みにくかった〈広場の市〉もあんがい楽に読めたばかりか、しるしていっぱいになりました。そして今度もゴットフリートとクリストフの会話には心をゆさぶられました。和睦し、みちたりた野や森や湖や星のもとでの、あの深い静かな語り！その彼も《あきらめて、悲しげな微笑をうかべ、ある夏の夕方の静かさの中でふたつの眼を閉じ》ました。また僕が、先日ある土地会社の倒産するのに出会ったとき、アントワネットの巻のはじめで、姉弟の父であり銀行家のジャンナが倒産し、一人で思い悩んだ末、不幸な最後を遂げる話と結びつけ、同情の気持ちがわき起ってくるのを押えることができませんでした。

この他にも、全巻を通じて、現在の僕たちと共通する出来事が描かれ、問題が論じられております。民主々義と多数決の問題、世代間の相違やヨーロッパ協同化の問題、国際金融家の活動、群集と警官の争い、車に乗って行く人間と歩いて行く人間の対比のことまでも……。《人生を認識し、しかもそれを愛する》ことを念じたロランの、この物語の、その大きさと深さは驚くほど豊かです。

読後に受けた感動は強烈で、なぜもつとはやく読みかえしておかなかったのかと残念です。そして最近に読んだ名の通った作品もちっぽけにみえました。全巻が常に〈生きること〉を主題にしながら各巻が《一つの生が亡び、別の一つの生が生まれ

る》こと、すなわち死と生を繰返しながら、高く昇ってフィナーレへ向って行くところは、ベートーヴェンの音楽のように力強く雄大です。

最終巻の「新しい日」では、ヨーロッパは、1914年夏の世界戦争を前にして、すでにいたるところで戦争がくすぶりはじめております。行動的な新しい世代は、深く考えることなく戦争へ接近し、準備さえしつづつあります。

この新しい別の世代の中で、クリストフは愛するグラチアの死の報せを受け、そのあと《窓ぎわで、頭を椅子の背にもたせかけて、正面の家々の屋根とそして夕映の、赤い空とを見つめ》人がそこへ来ていることにも気をとめず、日没の光の反射を受けながらいつまでも不動の表情のままです。

このとき《もはや苦悩が彼をつかんでいず、彼が苦悩をつかんでいた》し、彼の精神は充実し、人間と人間との相違を認め、愛するような静かで高い地点に到達しております。しかし《愛は理屈ではなく、行為である》と考えるクリストフは最後の仕事——愛と愛と、すなわち人と人と、クリストフがかって愛したオリヴィエの子とグラチアの子、ジョルジュとアウロラとを結びつけ、彼らを幸福とよろこびに導きます。クリストフは自分の役目をなし遂げたあと、精神は一層高く、明るく、澄んだ境地へ向っており、最後に、音楽と、かつて愛した人たちと、そして〈神〉との対話をしながら死んで行きます。

かつてクリストフが生まれたときに彼の祖父はいいました。《この子に望むことはただ一つ、それは一人の人間らしい人間になってくれ！》と。ついにそれは、なし遂げられたのです。そうしてクリストフは〈新しい生命〉を肩に、水流にさからって河を運びきったのです。この子供とは、永遠の新しい生命であり、人間の偉大さであり、愛の偉大さであると思います。なぜなら人間の価値と愛は育くめば、このように肩に背おいきれなくなるほど大きく生長するからです。僕たちが同じように、岸から岸へ、現在から未来へ、〈重荷〉を担って倒れずに渡しおえたとき、新しい日の、曙の光の中で、《何とあなたは重かったことだろう！あなたはいったい誰ですか？》と問うたとき僕たちが受けるその〈答〉は？

最後のこの物語は、人間の生涯を考えると、たいへんな問題を僕たちに提起しているように思えます。

最後にふりかえって自分を省みるとき《ひとの世の旅路のなかばで、ふと気がつくと、私はまっすぐな道を見失い、暗い森に迷いこんでいた》(ダンテ)自分を発見します。しかし恐れることはない。ロマン・ロランはこんなに近くにいます。僕もまた《クリストフの顔を見ている、いかなる日にも悪しき死を死なないだろう》から。

『ジャン・クリストフ』で最も重要なもの、(私のすべての作品と同様に)それは、思想ではありません。魂です。大学の批評のほとんど全部がおかしている誤りは、芸術作品を、知的な視点から批評していることです。思想は、私にとっては、魂たちと魂の諸々の集まりとの関連においてのみ存在するのです。思想はそれらの魂の放射なのです。描かれた作品の中では、思想は大きな位置を占めています。なぜなら、現代のヨーロッパの人間は、極端なまでに頭脳的だからです。しかし、作品の心髄は、内的な生命なのです。そしてそれは、ルイーザ、ゴットフリート、ザビーネ、アンナ、ジャクリーヌ、アントワネット、グラツィア、シュルツ、パリのせむしの少年など、様々な魂となって現われています。だからこそ— 彼らを愛しているからこそ私は書くのです。それ以外のことは付随的です。

(エリーゼ・リヒターへのロランの手紙より、1920年11月27日)

森 孝 子

友の会だより

ロマン・ロラン研究所のセミナーを兼ねた友の会の例会は、現在まで通算 203 回をかぞえています。その活動状況は下記の通りです。

1974年1月26日(土)

199 回例会

第 24 回 ロマン・ロラン・セミナー

「ロマン・ロラン生誕日に因んで」

出席者 21 名

2月23日(土)

200 回例会

第 25 回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ: 『ジャン・クリストフ』

第 10 巻 「新しい日」 第二部

発表者 成宮康恵氏

出席者 17 名

3月23日(土)

201 回例会

第 26 回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ: 『ジャン・クリストフ』

第 10 巻 「新しい日」 第三部

発表者 榊 充代氏

出席者 15 名

4月27日(土)

202 回例会

第27回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ： 『ジャン・クリストフ』

第10巻 「新しい日」 第四部

発表者 織田和夫氏

出席者 16名

5月25日(土)

203回例会

第28回 ロマン・ロラン・セミナー

テーマ： 『ジャン・クリストフ』をふりかえって

発表者 大橋哲夫

出席者 27名

ユニテ 第3期 第2号

発行日 1974年6月20日

編集代表者 大橋 哲夫

発行所 ロマン・ロラン研究所

京都市左京区銀閣寺前町32

TEL 075-711-3281

印刷所 昭和堂印刷所

京都市左京区百万辺交差点電停前

* ロマン・ロランセミナー

日時 毎月第4土曜日 午後7時～9時

場所 ロマン・ロラン研究所

会費 200円

講師 宮本正清先生・波多野茂弥先生

* 原書講読会

日時 毎月第2, 第4土曜日 午後3時～5時

場所 ロマン・ロラン研究所

会費 100円

講師 波多野茂弥先生

(参加自由)

主催 ロマン・ロラン研究所